

研 修 機 関	特別養護老人ホーム 長寿園
研 修 期 間	平成20年11月4日～12月3日
所 属 ・ 氏 名	珠洲市立直小学校 時 兼 薫

I 研修目的

- ・ 高齢者福祉介護施設でのさまざまな業務の体験を通し、福祉・介護についての見解を深めるとともに、理念や組織のあり方を学ぶ。
- ・ 職員・入居者・利用者の方々と接する中で、コミュニケーション能力の向上を図り、学校現場に生かす。

II 研修内容

1 特別養護老人ホーム [11月4日(火)～18日(火)、25日(火)～12月3日(水)]

① オリエンテーション

業務の説明、施設見学、入居者・利用者の状況について

② 介護全般の補助

- ・ 食事の介助

(手ふき、お茶、水分補給、エプロンの配布・着脱、食事の配膳、口腔ケアの準備、掃除)

- ・ 移動の介助

(トイレ・風呂場への誘導、車いす・歩行器からの移乗の補助)

- ・ 女性入浴の介助

(衣服の着脱、おむつ交換の補助、水分補給)

③ コミュニケーションおよび余暇活動・機能訓練支援

(入居者の話し相手、風船ゲーム、ボール遊び、ぬりえ、ペン習字、ボーリング、紙芝居、カラオケ、パズル)

④ 作業

(洗濯物たたみと仕分け、おしぼりの準備)

2 デイサービスセンター研修 [11月19日(水)～24日(月)]

① オリエンテーション

業務の説明、施設見学、入居者・利用者の状況について

② 食事の介助

(お茶、水分補給、食事の配膳)

③ コミュニケーションおよび余暇活動・機能訓練支援

(利用者の話し相手、鈴送りゲーム、カラオケ、歩行の補助、体操)

④ 作業

(テーブル、いすの移動、掃除)

⑤ ミーティング

(利用者の様子からの気づき、申し送り事項についての話し合い)

Ⅲ 研修成果

(1) 基本理念に基づいた各種事業、業務の推進

「尊厳」「敬愛」「協和」の3つの理念のもと、基本方針を、「経営基盤の充実化と組織の活性化」「質の高いサービスの提供」「地域社会への貢献」と掲げ、各分野での職員の方々が、組織として行動されていた。

その姿勢にプロ意識を感じるとともに、わたしたち教職員も学校教育目標の具現化を目指し、同じ方向性を持って組織的に教育にあたる事の大切さを再認識した。

(2) 一人ひとりに応じたきめ細やかな対応

入居者・利用者の介護度は様々であり、多様なニーズに対応したサービスが提供されている。一人ひとりの人間性を敬い、思いやりのある介護を心掛けておられる。そこには、要介護者の自立支援に向け、やさしい言葉かけと笑顔、真心が感じられた。また、それは、自立を妨げるような目先だけのサービスではなく、見通しを持った支援がなされていた。

余暇活動では、一人ひとりの個性や特技を生かすことができるよう気を配られ、頑張りを認めたり、さらに意欲を高められるよう声かけをされていたりした。

そのきめ細やかな対応は、児童一人ひとりに寄り添い個性を伸ばすうえでとても大切なことである。

(3) 職員の協力体制

入居者・利用者一人ひとりの様子を項目に応じてパソコンで入力したり、申し送りノートを記入したりしておられた。それらに目を通すことで、情報を共有し、小さな変化にすぐ対応出来るように努められていた。

これは、学級で問題が生じた時、それを担任で一人で抱え込み、解決しようとするのではなく、学校全体の問題として捉え共通理解し、よりよい解決法を見つけ、支援にあたる協力体制と同じであると感じた。

(4) コミュニケーションの図り方

体の不自由な方、認知症の方、介護が必要な方、話し好きな方などさまざまな方が入所されている。まず、相手を知ろうとする気持ちが大切であり、「～さん、～・・・。」と職員から話しかけようとしておられた。自分から話さない人もおいでるが、声をかけられると、表情が和らいでいるように見える。余暇の時間は、話を聞いたり、一緒に機能回復訓練をしたり、レクリエーションを行ったりするが、それは、職員と利用者、利用者同志がよい人間関係を作るチャンスでもある。

お互いの事を思いやりながら、気持ちよく仲良く過ごせるような雰囲気作りを行うこと、また、一人ひとりの居場所を確保できるようにすることは、学級作りの基盤となるべきものであると痛感した。

Ⅳ 今後の課題

長寿園に生活しておられる方は、それぞれの事情があり、現在に至っている。あったものが失われつつある人間性をどう取り戻していくのか、また、維持していくことができるのか。そのために、どのような気配りをすることがより良いことなのか。基本的な介護に終わってしまっていないだろうか・・・。その場の表面的なやさしさは、誤ったサービスになる。これからの人生をどのように充実していただくことがより better なのか・・・という局長さんの言葉が心に残った。

少子高齢化社会が進行している今、家庭内の支援・介護力が低下していることは否めない。

また、利用者・入居者の様々なニーズに答えることが出来る施設整備の困難性、介護労働者不足による社会的介護力低下も深刻化している。ここでは、日頃から地域のボランティアの方々が足を運んでくださったり、こちらから、公民館や文化施設を訪れたりして交流を深めているが、今以上に、施設サービスと地域が連携し、一体となって福祉の推進を行う必要性を強く感じた。

長寿園は「人による人への介護」、学校は、「人による人への教育」の場である。そこには、人との関わりをもつという共通点があり、学ぶべき事がたくさんあった。学校現場から離れ、異なる職場を体験することで、それを改めて確認することができたように思う。そして、自分が人と関わる仕事に携わっていることの重みと責任を感じた。

今後、さらに、教育効果を高めることが出来るよう、私自身が知識と技術を身につけ、どう支援していくことがその子にとってよいのか、見通しを持って関わっていくことが大切である。そのためにも、保護者や地域の方々と相互に協力し合い、連携を密にしていきたい。